

# 琉球大学学術リポジトリ

## 学習教育目標の達成度評価方法・方針

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜崎, 盛康 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41225">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41225</a>

# 学習教育目標の達成度評価方法・方針

浜崎盛康（大学教育センター長）

昨年（2012年）4月から琉大グローバルシティズン・カリキュラム（URGCC）がスタートし、今年で2年目に入った。昨年、大学教育センター及びURGCC推進支援室、そして全学学士教育プログラム委員会が取り組んだ主な事項は次のA～Dであった。

- A. 学習教育目標の達成に向けた具体的取り組み
  - A-1. DPとCPの関係の明確化
  - A-2. 学習達成度評価の試行（トライアル）
- B. 小冊子原稿の改訂作業（学習教育目標の対応関係表、3つの方針の確認を含む）
  - B-1. CPの確認
- C. 初年次教育を含むカリキュラムの順次生・体系性の確認
  - C-1. 初年次教育についての課題の整理と解決策の検討
- D. 履修モデルのバランスの確認
  - D-1. CPに沿ったカリキュラム（履修モデル）の構築
  - D-2. 4（6）年一貫教育としてのカリキュラムの確認

以上の主要な取り組みをおおむね順調にこなしながら、URGCC初年度はスタートが切れたと言えようが、今年は予定通り「学習教育目標の達成度評価方法・方針の検討及び策定」を重点事項として取り組んでいる。具体的には、「学習教育目標の達成を的確に測定するための評価方法の設定」、「学習教育目標の達成度評価の方針（アセスメント・ポリシー）の設定」である。

学修達成度評価の方法の一つとして学生調査があるが、大学教育センター及びURGCC推進支援室は、既に、「琉球大学の教育改善のための学生調査2011」（大学教育センター報第15号）、「琉球大学の教育改善のための学生調査2012」（本16号）を行っている。そして、「琉球大学の教育改善のための学生調査2013」も、目下進行中である。また、昨年度は、ラーニング・ポートフォリオに関するFDを実施し、また全学学士教育プログラム委員会委員の中から有志数名によるラーニングポートフォリオを用いた授業の成績評価の試行を行ってもらい、同委員会で報告してもらった。しかし、これらを踏まえつつも、これら以外の学修達成度評価方法についても、検討し実施する必要がある。それが今年度の課題なのである。

他方、高等教育を巡る国の動きも、昨今目まぐるしい。あまり遑らずに、幾つか目についたものを挙げてみるだけでも、次のようである。

- ・ 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）、

平成24年3月26日、中央教育審議会大学分科会大学教育部会

- ・ 「大学改革実行プラン」、平成24年6月、文部科学省

- ・「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(答申)、平成24年8月28日、中央教育審議会
- ・「これからの大学教育等の在り方について」(第三次提言)、平成25年5月28日、教育再生実行会議
- ・「教育振興基本計画」(第2期)、平成25年6月14日、閣議決定
- ・「今後の国立大学の機能強化に向けての考え方」、国立大学法人学長・大学共同利用機関法人機構長会議、平成25年6月20日、文部科学省

学修達成度の評価に関することを中心に見てみると、今年度に入ってからのもものでは、特に「教育振興基本計画」に述べられていることが関連性が大きいように思われる。すなわち、この「計画」では達成度評価に関して、「学修成果の把握に関する研究・開発」の項目のもとで「学生の学修成果の把握の具体的な方策について、国際機関における取組の動向や諸外国の例も参考にしつつ、大学間連携組織(コンソーシアム)、学協会等における速やか、かつ多面的な研究・開発を推進する」と述べられている(あるいは、大学評価の改善に関して「学修成果を重視した認証評価」という言葉も見える)。これは、まさに今年度我々が取り組んでいることである。コンソーシアムに関しては、大教センターは、北海道大学や同志社大学等の7大学(琉球大学を入れて8大学)と、平成24年度及び25年度、「教学評価体制(IRネットワーク)による学士課程教育の質保証」(文部科学省 大学間連携共同教育推進事業)に取り組んでおり、IRネットワークによる達成度評価に関して研究・開発を進めている。また、この「教育振興基本計画」では、「プログラムとしての学士教育課程」という概念定着のための検討を進める、とも述べられている。これは、URGCCの実施責任主体として、本学は既に学士教育プログラムという単位を設定し、全学学教育プログラム委員会を立ち上げ、「プログラムとしての学士教育課程」を実現し、実施し始めているものである。

我々は、全学学士教育プログラム委員会、あるいは全学教育委員会等における議論を通して、全学的にURGCCを決定し、スタートして2年目に入った。他方、教育再生実行会議は、平成25年から平成29年までの5年間を「大学改革実行集中期間」として位置づけることを提言しており(「これからの大学教育等の在り方について」(第三次提言))、また、文部科学省は、「国立大学改革プラン」(仮称)を、来年の夏を目途に策定する(「今後の国立大学の機能強化に向けての考え方」)とも述べている。このような高等教育を巡る目まぐるしい動きにも目を配りながら、大教センターとしても各学部等と連携しながら本学のURGCCを着実に進めていきたい。